

気候変動教育に チャレンジする 箕面こどもの森学園



お芝居「ちーきゅんを救え! エコパワー大作戦」

「くるしかった!」「むしむしする〜!」

低学年クラス(1~3年生)の子どもたちが、大きなビニール袋の中から出てきました。「自分たちが地球だったらどんな感じかな?」というスタッフの問いかけから、大きなビニール袋に入って温度の変化を体感していたのです。

「地球はずっと入っているから、もっと暑いと思う」などといった声が子どもたちから上がり、「地球レスキューだいけんきゅう!」が始まることになりました。

学習では、「もったいないシール」を貼って全校にエコ活動を呼びかけたり、動物園を見学し温暖化が動物たちに与えている影響や、ボルネオ島の森林保護とオランウータンの保護活動のお話を聞いたりした子どもたち。

「こんな地球だったらいいな」という願いをこめた大きな絵の制作と、「ちーきゅんを救え! エコパワー大作戦」というお芝居をつくり発表しました。

高学年(4~6年生)と中学部は、環境問題に取り組んでいる方々を講師に招き、地球環境の現実を学びました。CO₂を計測する器械や手回し発電を使ってのワークショップに参加したり、パーム油生産のために森林破壊が行われていること、パーム油は私たちの生活に深く関わっていることを学んだり、国連気候変動枠組条約締約国会議(COP)に参加している方のお話を聞いたりしました。

ちょうどこの頃に、アメリカがパリ協定から離脱するという出来事が起きたため、アメリカの離脱について考える時間をもちました。漠然とした不安をかかえていた子どもたちでしたが、「We are still in(私たちは、まだパリ協定の中にいる)」と主張する動きがあることなどが分かると、「少し安心した」とホッとした様子でした。



手回し発電を使ってワークショップ



地球レスキューこどもの森会議

その後、子どもたちは、「動物への影響」「サンゴの白化」「気候変動と医療保険との関係」「温暖化は本当に起きているのか」「気候変動と災害の関係」など、自分の関心のあるテーマについて調べ、学習発表会で発表しました。

身近なことから取り組んでいくことの大切さを学んだ子どもたち。学びの集大成として、全校生徒による「地球レスキューこどもの森会議」を開催し、この学習が終わっても継続的に取り組んでいくことを決めました。

会議当日。ゲストとしてお話にきていただいた方々や保護者の方だけでなく、地域の方や大学生など多くの方に参加していただき、「地球レスキューこどもの森会議」が始まりました。

出されたアイデアを全員で共有した後、どのアイデアを学校全体で取り組んでいくかを話し合った結果、「明るいときは電気を消す」「できるだけうちわを使う」「トイレの流す水は小」「歩ける人はなるべく歩く」などの12項目が選ばれました。

気候変動といわれても、遠い世界の話で、自分たちの生活とどう結びついているのか考える機会がなかった子どもたちでしたが、一つひとつの学習を積み重ねていく中で、自分と気候変動とのかかわりに気がついていきました。一人ひとりの意識が変化し、自分たちにもできる小さな行動の積み重ねが、大きな変化を生み出していくことにつながるということを学ぶ機会になったと思います。

藤田美保 認定NPO法人箕面こどもの森学園 校長